

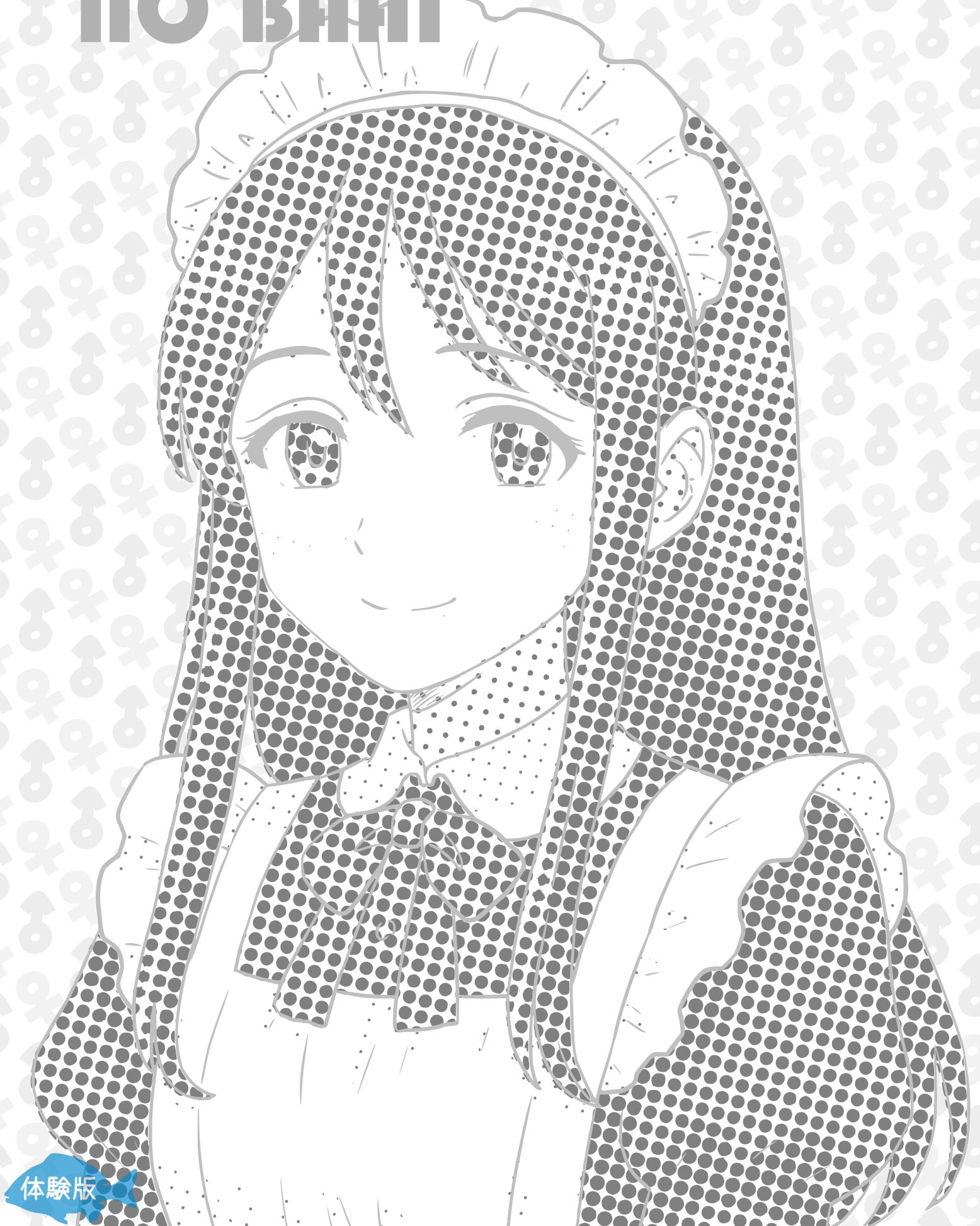
TSFコア ソルジャー



感度増大
感覚遮断
幸せエンド

力が巨
ア中
の場合

KAGAMI AKI no BAAH



目次

登場キャラクター	4 ページ
第1章 野外チャレンジ	5 ページ
第2章 小遣い稼ぎ	19 ページ
第3章 マンガ喫茶での出会い	40 ページ
第4章 一つ屋根の下	64 ページ
第5章 赤ちゃん部屋	76 ページ
第6章 調理台	85 ページ
あとがき	89 ページ
作品紹介	90 ページ



登場キャラクター

■ 加賀見 秋生／亜紀（カガミ アキオ／アキ）

主人公。フリーランス。体格がよく、眼鏡をかけている。趣味はコンピューター全般とマンガ。メイド好き。誠実な男だが、他人と積極的に交わらないために女縁はない。

■ 真壁 篤志（マカベ アツシ）

フリーランス。体格がよく、眼鏡をかけている。趣味はコンピューター全般とマンガ。メイド好き。誠実な男だが、他人と積極的に交わらないために女縁はない。

第1章

野外チャレンジ



裾の長いメイド服を着て、頭にホワイトブリムをつけた。こうした姿は真壁の趣味だ。

僕は今、知り合って三週間目の男、真壁篤志の部屋で暮らしている。真壁は、大柄で筋肉

質で眼鏡をかけた人物だ。

僕の名前は加賀見亜紀、性別は女性。男性のときの名前は加賀見秋生。体が女性になつたのは四週間前。『Eゲーム』という謎のアプリのせいで肉体が組み変わった。そしてアプリが提示する性的なチャレンジをこなしていき、一週間目に真壁に出会い同棲するようになつた。

「本当に、このメイド服で外出するんですか？」

マンションの玄関。真壁の前で、僕は両手を広げてくるりと回る。

「俺の趣味に付き合わせることになりますがお願ひします」

真壁はいつも冷静で紳士的だ。初めて出会ってセックスをしたときも、ていねいに僕に相対してくれた。

「真壁さんが満足するなら、僕はそれでいいですけど」

少し首をかしげて言う。本当は、この格好で外出するのは、ちょっと恥ずかしい。もつとふつうで目立たない姿がよかつた。だって、このあと野外セックスをする予定だから。そのための準備はすでにしてある。

ブラジャーは最初から外している。ショーツも脱いでいる。スカートの下の下半身は、黒いストッキングとガーターベルトだけだ。股間を覆う布をなくしているのは、どこでも



すぐに挿入可能にするためだ。

終わつたあとの準備も万端だ。ティッシュペーパーとウェットティッシュをたっぷりと鞄に入れている。拭いたあとのゴミを入れるためのビニール袋も用意している。あとは人目をしのんで膣内に精液を出してもらえば、チャレンジを達成できる。

「外出前に、もう一度チャレンジを確認しておきますね」

スマホを出して『Eゲーム』のアプリを起動する。「チャレンジリスト」のボタンを押して、リストに並ぶ項目を確認した。

——感度増大プレイをする。5ポイント。

——感覚遮断プレイをする。5ポイント。

——公園で野外プレイをして、パートナーに中出ししてもらう。10ポイント。

——乳首をつまんでもらいながら、ディープキスをする。1ポイント。

最初の二つは、一週間前から残っているチャレンジだ。パートナーである真壁もスマホに『Eゲーム』をインストールしている。彼のゲーム画面には、僕の肉体を操作するボタンが並んでいる。

感覚増大は、感度を一倍から十倍まで変化させられるツールだ。感覚遮断は、オフの時にためた性的な刺激を、オンの時にまとめて実行するツールだ。どちらのツールも、怖くてまだ使っていない。

今日の野外プレイでは、感度増大も試そうと話し合つて決めた。



他のチャレンジは、やらなければいつの間にか消えている。しかし、感度増大と感覚遮断はずっと残り続いている。どこかのタイミングで必ずやらないといけないチャレンジなのだ。RPGなら中ボス戦といったところだ。今日は野外プレイとともに、感覚増大を片付けてしまう予定だ。

「真壁さん。僕の格好、変じやないですか？」

玄関で靴を履きながら、上目遣いで見上げた。

「大丈夫です、問題ないです。しっかり体を隠せています。もともと屋敷の黒子に徹するための服ですから。まさか、その下が全裸に近いとは気づかれないでしょう」

真面目な顔で真壁は分析する。悪い人じやないし、礼儀正しい人なんだけど、こういう話をしていると、ちょっとズレているよなあと思う。

「じゃあ真壁さん、外出前に1ポイント稼いでしまいましょう」

「分かりました」

僕は両手を背中側に回して、胸を前に突き出した。

メイド服の布地は厚みがあるために乳首の形は分からない。真壁は両手を上げて、正確に僕の乳首の場所を探り当てる。機械のような精度で突起をつまみ、きゅつ、きゅつ、とつまんで刺激を与えてきた。

マッサージをされたように全身が弛緩する。すでに十分に開発されている体は、少しの刺激で変化する。膣壁がゆるんで湿ってきた。両脚に力を入れて引き締める。油断をする



と愛液が垂れてくる。このあと歩くときに足下を濡らしてしまう。

自分の口元が開き、熱を帯びた吐息が漏れるのが分かった。その淫氣の漏れを塞ぐように唇が重ねられた。

口を開き、真壁の接吻を受け入れる。真壁の舌が入ってきた。彼の太く力強い舌をなめて、交尾のように絡め合う。

乳首への刺激は続いている。口内の求め合いも激しさを増す。全身からじわりと汗が出来る。男を誘うフェロモン。自分の周りに甘い香りがただよっていることを自覚する。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『乳首ディープキス』を達成しました。加賀見亜紀は1ポイントを獲得しました！』

女性の声で通知が読み上げられる。

『Eゲーム』のポイントは、1ポイントにつき一万円に換金できる。最近の僕は、このお金を生活費に充てたり、服飾代にしたりしている。また、大人の玩具の通販にも利用している。

乳首から手が離れた。絡めていた舌が解放される。僕の顔の高さに合わせて腰を屈めていた真壁が背を伸ばした。

今すぐセックスをしたかった。求めるような目を向けると真壁に制された。

「今日のメインは公園です。このまま始めたら、また家を出さずに終わってしまいます」

昨日、一昨日の失敗だ。玄関で挿入して、そのまま夜まで交合を続けた。同じことを繰



り返さないためにも、我慢して外出しなければならない。

「行きましょう、亜紀さん」

「はい、真壁さん」

二人で玄関の扉を抜け、マンションのエレベーターに向かった。



真壁の住むマンションは駅に隣接するように建っている。そこから五分ほど歩き、目的の公園にたどり着く。木々が生い茂り、野球場もある公園。まだ午後二時ぐらいで、人はそこかしこにいる。こんなに明るい場所で、人にばれずに行行為ができるのかと思い緊張する。

「真壁さん。さすがにこの時間帯は無理がないですか？」

「誰もいないところでセックスしても、野外プレイの意味がないでしょうから」

真壁は、野外プレイに対する独自の概念を有しているのだろう。真壁は謎のこだわりを持つていることが多い。そして一度言い出すとなかなか引き下がらない。そのことは、ともに生活をしているから知っている。

真夜中の誰もいない公園でもよいのではと思う。

子供もまだ遊んでいる日中に、性行為を試みるのは無謀すぎる。恥ずかしいのは真壁で



はなく僕の方だ。人目のある場所で挿入されて声を上げるのは、彼ではなくて僕なんだから。

真壁はスマホを出して操作する。そして僕に地図を見せてきた。

「亜紀さん。公園の地図です。周囲と園内の道、そこから求められる人の導線と視界が通る範囲を計算して、死角になる場所を割り出しました。この地図の暗いところがその地点です。現地での人の動きを確かめて、このいずれかの場所で決行しましよう」

「はい」

この人、本気だ。三日前の夜に、なにかしているなと思ったが、こんな地図を作つていたのか。

真壁と一緒に死角の場所を回る。僕は真壁の袖をつかみ、頬を赤くしながら付き従う。どの場所でやるんだろう。いつ「ここで始めます」と言われるんだろう。射精のロシアンルーレットを待つ気分。僕は下を向いて、ついて回つた。

「ここにしましょう」

顔を上げて周囲を見た。

野球場の横に、備品をしまうための小さな建物がある。ブロックを積み上げて屋根を付けただけの簡易的なものだ。壁にはペンキが塗られ、そこには子供たちが描いた絵がプリントされている。運動会の絵、遠足の絵、給食の絵。そうした絵に囲まれた建物の陰に、茂みに覆われた場所があつた。



「今日のこの時間帯は野球場の使用はありません。小学校も終わっていないので子供たちもいません。この近くに人が来ることはごくまれです。たとえ来たとしても、建物の陰にある茂みの中をのぞく人はいないでしょう。誰か近づいてくれば気配で分かります。結合を解いて、そしらぬ振りをすればやり過ごせます」

「本当にやるんですか？」

スカートの裾をぎゅっと握って上目遣いに尋ねる。

「素早く済ませた方がいいです。ぐずぐずするほど危険度は上がりますから」

真壁は合理的な人間だ。野外プレイであっても、成功の確率を上げるために努力する。

下準備をして、事前調査をして、現地でも最大限の効率化を求める。

「分かりました、お願ひします」

覚悟を決めた。真壁はうなずき、スマホを操作して『Eゲーム』を起動する。そしてツールの中から「感度増大」のボタンを押して、感度のスライダーを最大の十倍に設定した。

「なにか変化はありますか？」

「いえ、今のところはなにも」

「感度ですから、やはり刺激をしないといけないのでしょう」

真壁は僕の尻に触れる。

「うううんっつっつ！」

軽く触られただけなのに、神経に直接触れたような感覚が脳まで上がってきた。全身を、



電気をまとった刷毛で、なでられたように感じた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫、れす」

快感がまだ体内でこだましているようだ。刺激が全身を駆け巡り増幅されていた。これで乳首やクリトリスを触られたらどうなるんだろう。考えるだけで恐ろしくなった。

「前戯は必要ですか？」

「それだけで動けなくなつてしまいそうです」

「では、手早く挿入しますか？」

「そうしてください」

「後背位で行きましょう。周囲への警戒と、有事への対処を考えると、それが最適だと思われます」

「もう全部、真壁さんにお任せします」

言われるがまま建物の壁に両手を突いた。スカートをたくし上げられ、ストッキングにガーネルベルトの下半身を露出させられる。

ショーツをはいていないから、お尻がすーすーする。さらけ出した花弁に屋外の風が当たつているのが十倍の感度で感じ取れた。

「ローションをたっぷりと入れたオナホールのようになつています」

「報告はいいですから、早く挿入してください」





首を曲げて背後を見た。真壁はズボンのファスナーを下ろしている。そして、ぱんぱんに張つたペニスを取り出した。

僕のお尻のあいだに真壁は肉棒をあてがう。火傷のような熱を股間に感じる。亀頭の温度が十倍に増幅されて感じられる。膣口が押し広げられた。分厚い膣の肉を押しのけて力りが入つてくる。神経の数を十倍にしたように、精細にペニスの動きを感じ取れた。

これはヤバい。顔が真っ赤になり火を噴きそうだった。

腰に手をあてがわれてゾクッとした。時間を十倍に引き延ばされて、十倍大きなペニスを入れられているような感覚を味わった。真壁のペニスは十八センチぐらいある。その十倍というと1・8メートルの肉柱だ。柱と呼ぶにふさわしい存在に全身を貫かれて、内部からゴシゴシとこすられた。

「ああああああああああああああああああつ！・！・！」

絶えられず声を上げる。その声帯の振動すらも刺激となり全身に反響する。刺激の反響は膣にも届き、そこで生まれた感覚が無限に体内を反射し続ける。

巨人に体を驚づかみにされ、ペニスを刺され、使い捨てオナホにされる姿を想像する。

体感的にはそれに近い状況に、肉体と脳が追い込まれる。

腰が何度も痙攣している。その動きを抑え込むように真壁は太い指で僕の体を固定している。そのせいで振動はペニスを揺らすしかない。真壁の感覚としてはバイブルーター付きオナホに突つこんでいるようなものだろう。



「駄目、抜いて、休ませて、ください！」

「長居しない方がいいです。手早く済ませるべきです」

「ペニキを塗ったブロック塀に爪を立てる。その痛みが体内を駆け巡る。脳が焼かれる。痛みと快感の反復だけでない。ブラジャーを着けていない乳首が、服の中でこすれている。風の当たった肥大したクリトリスがじんじんしている。真壁は腰を激しく打ち付けてくる。せめて早く果てて欲しかった。」

大量の精液が一気に放出された。ザーメンの奔流を膣全体で感じる。ずっしりと重い液体が下腹部を満たしていく。跳ね回るペニスに膣壁を叩かれて何度も腰をひくつかせる。全身を性器にされたような感覚を味わった。

余韻を楽しむように真壁は腰をぴつたりと付けている。僕は、もうなにも考えられなかった。僕の肉体は、男のペニスを包む皮袋になっている。自分という存在が消えて、膣肉だけの存在になっている。

「抜きます」

「ひああああああつ！」

「スponと抜かれて、その刺激で絶頂した。口を大きく開き、体をのけぞらす。そのまま倒れるかと思ったが、腰を支えられているので事なきを得た。

「どうでしたか？」

「か、感度増大を、早く、切って、ください」



このままでは死んでしまう。真壁は片手で僕の腰を支えたまま、もう片方の手でアブリを操作した。

全身を駆け巡っていた快感の反復が消えた。挿入されたペニスの感覚と、中出しの余韻だけが残された。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『感度増大』を達成しました。加賀見亞紀は5ポイントを獲得しました！』

『コングラチュレーション！ チャレンジ『野外プレイ』を達成しました。加賀見亞紀は10ポイントを獲得しました！』

真壁は僕の体を支えて左足を持ち上げる。犬がおしつこをするときのように大股開きになつた。

真壁の右手の太い指が、僕の膣に入つてくる。真壁はひだのあいだまで探つてザーメンをかき出す。精液がきれいに取れたところで、ティッシュペーパーを使って股間を優しく拭いてくれた。最後の仕上げにウェットティッシュできれいにしてくれた。僕は脱力したまま真壁の奉仕を受け入れた。

スカートの裾を下ろして自分の足で立つ。まだ腰がガクガクしていて、まっすぐに立つことが難しかつた。

「俺がおんぶしましようか？」

真面目な顔で真壁が尋ねてくる。それもいいかなと思ったあと、慌てて首を横に振つた。



「真壁さん、それは大変まずいと思います」

「どうしてですか？」

「おんぶをすると足を広げますよね。そして真壁さんは背が高いですよね」

「そうですね」

「そうすると、子供の視点からスカートの中をのぞいたら、全部見えてしまいます。僕、なにもはいていないですから」

「あっ」

二人で顔を見合わせて笑った。小さな子供に、変な性癖を植えつけてしまうのは、避けた方がよい。

少し離れた木陰で休んでから帰ることにした。二人で芝生に座り、公園を過ぎ去る風を浴びて時を過ごした。

「おだやかな時間ですね、真壁さん」

「ええ、亜紀さんと出会つてから、怒濤のような日々でしたから」

真壁は真面目な顔で答える。

僕は、真壁と『Eゲーム』のチャレンジをハイペースでこなした。そして真壁も『Eゲーム』をインストールした。

僕は女役で、真壁は男役だ。

その真壁の『Eゲーム』の画面には「ツール」というボタンがあり、三つの項目が並ん



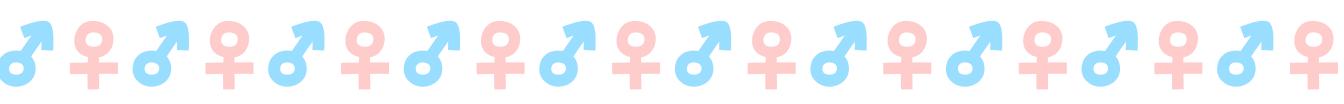
でいる。

断面表示。

感度増大。

感覺遮断。

断面表示、感度増大は利用した。残りは一つ、感覺遮断が残されていた。



第2章

小遣い稼ぎ





加賀見秋生は、アパートの畳敷きの部屋で寝そべり蛍光灯を見上げていた。

地元を飛び出して関東に来て二年。バイトをしてなんとか食いつながりできたが、そろそろ限界だった。

どのバイトも入った直後は親切に仕事を教えられる。しかし二週間、三週間と経つたら雲行きが怪しくなる。ミスをするわけではない。仕事の物覚えもよい方だ。原因はコミュニケーション能力の不足にあつた。

「はあ、僕つて本当に駄目だな」

思わず愚痴の言葉が漏れる。

相手の言葉にすぐに声を返さない。意識して早く返すと、相手の会話を遮ってしまう。短い挨拶を返せばよいのに、長々と話してしまう。詳細な説明を求められているのに短く途切れてしまう。適切な受け答えができずに場の空気を乱してしまう。一ヶ月も経たないうちに完全に孤立してしまい、自分から退職を願い出ることが続いている。

環境を変えれば人生を変えられる。高校時代に、そうした自己啓発の本を読んで奮起した。自分のことを誰も知らない場所に引っ越してきたのはそのためだつた。しかし、環境の中で最も大きな部分は、自分なのだと思い知つた。自分自身を変えないと駄目なのだと痛感した。

「お腹、減ったな」

貯金が底をつきかけている。うどんに塩をかけて飢えをしのいでいる。早く次の仕事を



探さないといけない。しかし全てが億劫になっていた。

スマホの通知音が聞こえた。広告メールが届いたのだろう。やり取りする友人はいない。

一方的に送られてくる広告が、世間との唯一の接点だった。

スマホを手に取り、画面を見る。

「ゲームの広告か」

ふだん、スマホでゲームはしない。課金できるお金はないし、能動的に何かをやる気も起きない。ふだんは、ショート動画を見て時間をつぶすことが多い。

届いたメールには、ゲームのタイトル名と説明が書いてあった。名前は『Eゲーム』。ちょっとHな体験ができるアプリだそうだ。さまざまなチャレンジをこなすとポイントがもらえて換金できる。ぼんやりと読んでいると、一つのフレーズが目に留まった。
——自分自身を変えて、新しい環境で人生をやり直せます。

まだ希望にあふれていた時期なら無視したはずだ。しかし現実に打ちひしがれている今なら違う。

試してみよう。なにも変わらなくても、今よりも悪くなることはないだろう。

アプリをインストールして起動する。高級クラブを思わせるシックなタイトル画面が表示された。

画面上部には『Eゲーム』というゴールドのロゴがある。真ん中より少し下には「ゲームスタート」と書いたボタンがあった。



「これを押せばいいんだよな」

嫌な予感がした。自分の人生が大きくねじ曲がってしまう不安。これから墜落する飛行機に乗るような違和感。紙やすりの上で指を滑らしたような、ざらりとした不快感。

今ならまだ引き返せる——。心の中で誰かが言つた。

「ふんっ」

どうとでもなれ。

一呼吸置いてボタンを押した。そして画面が変わることを待つた。

スマホから強烈な光が発射された。その光が全身を包み、視界を真っ白に染め上げる。肉体だけが白い空間に投げ出された。上も下も右も左もない世界。とてつもなく大きな存在が自分を見下ろしている気配を感じた。

カシャリ、と音がした。自分の左腕の一部が、ルービックキューブのように回転した。驚いて左腕を見ると同じ音がして、今度は左右の足が変化した。音の間隔が短くなる。最後には音で全身が埋め尽くされる。体をサイコロステーキのようにバラバラにされて、違う形に組み上げられた。

光が消えて元の部屋に戻ってきた。先ほどと同じように天井を見上げてスマホを持つている。

いつたい何があつたんだ。夢でも見ていたのか。心臓が激しく鼓動していた。夢と切り捨てるには妙なリアルさがあった。



スマホの表示が変わった。ステータス画面が現れている。そういえば、これはゲームだった。表示されている内容を確かめる。

美しい女性の顔のイラストが上部にあり、その下に名前があった。加賀見亜紀、性別は女性。自分の名前をもじっているのか。スマホに登録した個人情報を利用しているのか。権限を許可した覚えはないのだが。疑問を持ちながら続きを見る。

知力52、体力48、運6、性欲47、ポイント1。

「ははっ」

思わず笑いが漏れた。

何点満点なのかは知らない。おそらく100点満点での数値だろう。知力、体力の値から、真ん中が50ぐらいのは想像が付く。その中で運だけが突出して低い。自分の人生を見透かされている気がして泣けてきた。

「ポイントって何だ？」

ステータスの末尾にあり、1になっている。その下には「チャレンジ」と「換金」のボタンがあり、ボタンの下には小さな字の説明がある。説明を読むと、1ポイントを一万円に換金できると書いてあつた。

今一万円あれば、どれだけ助かることか。

半信半疑のまま「換金」ボタンを押した。PayPayのアイコンが出たのでタップする。PayPayのアプリが起動したので残高を確認した。



「一万円、増えている！」

眠気が吹っ飛んだ。

アプリをインストールして起動しただけで一万円のボーナス。これで数日あいだ食費に困らずに済む。感謝の気持ちでいっぱいになりながら、次は「チャレンジ」ボタンを押してみた。

画面が切り替わり、リストが表示された。

——裸で自撮りをする。4ポイント。

——外出する。1ポイント。

——コンビニでコンドームを買う。3ポイント。

——コンビニで店員におっぱいを見せる。5ポイント。

なんだこれは？ 混乱した頭の中を整理する。

そういえば届いたメールには、『Eゲーム』は少しHな体験ができると書いてあった。

こんなことをして、なぜお金をもらえるのか分からぬ。しかしリストの行為をして、もし本当にお金を得られるのならば、必死になつて次の仕事を探さないで済む。

「最初の一つ以外は、外出しないといけないんだよな」

屋外での活動は、なにか悪いことに巻き込まれる恐れがある。闇バイトという言葉が頭に浮かぶ。実験をするなら部屋の中でやることがよいと思つた。

腰を上げて立ち上がった。服が、ぶかぶかになつている気がする。ジャージの袖は長い



し、ズボンの裾をかかとで踏んでいる。

上のジャージを脱いで、肌着を頭から引き抜いた。上半身裸になつた自分の体を見て動きを止める。しばらくじつと観察したあと、胸にぶら下がつてゐる大きな乳房に触れてみた。

「おっぱいがある」

巨乳というほどではないが、しっかりと大きなおっぱいがあつた。乳輪はピンクで、乳首はちよこんと盛り上がつてゐる。変化はそれだけではない。体が全体的に華奢になつてゐる。肌はなめらかになり白くなつてゐる。腰はくびれて、へその周りの肉は柔らかくなつていた。

——加賀見亜紀、性別女性。

『Eゲーム』の画面に表示されていた名前と性別を思い出す。白い世界の中で、自分の肉体が組み変わつたのは事実だつたのか。

おそるおそるズボンとパンツを下げる。腰が広くなり、太ももが太くなつてゐた。そのあいだの逆三角形の隙間には、なにもなかつた。正確に言うならば、薄く陰毛があり、数分前までは存在していた陰茎や睾丸が消失してゐた。

女性の体になつたのか。指で股を触れて、幻ではないことを確かめる。簡単にお金が手に入るかもと浮かれていた自分を呪つた。

「ということは——」





頭を切り替えて、もう一度チャレンジリストの内容を確かめる。

——裸で自撮りをする。4. ポイント。

——外出する。1. ポイント。

——コンビニでコンドームを買う。3.ポイント。

——コンビニで店員におっぱいを見せる。5.5ポイント。

この項目は、自分が男性なのか女性なのかで大きく意味合いが異なる。特に最後の項目は致命的だ。男性なら、はだけたシャツを着た陽キャですませられるが、女性ならただの痴女だ。

外出するだけで1.ポイントというのも、自分が女性になつて いるのなら容易ではない。

どんな服で外に出るのかという問題が生じる。

頭が真っ白になつて、しばらくぼうつとした。

りをしておこうと思った。

これでポイントを換金できるのならば、四万円を手にすることができる。最初の1ポイントと合わせて五万円。これほどありがたいことはない。

まず、スマホのクラウド連携を切った。裸の写真をアップロードするのはまずい。そして自撮りモードで自分の裸を撮影した。特に意味はないが、ピースもしてみた。

《ピロンツ！》



通知音が鳴った。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『裸自撮り』を達成しました。加賀見亜紀は4ポイントを獲得しました！』

女性の声が聞こえたあと、ステータス画面が表示される。「換金」ボタンを押した。四万円がチャージされた。脳内麻薬がドパドパと出るのを感じた。

画面を戻して、チャレンジリストを表示する。裸自撮りが消えて、新しいチャレンジが追加されていた。

——外出する。1ポイント。

——コンビニでコンドームを買う。3ポイント。

——コンビニで店員におっぱいを見せる。5ポイント。

——コンビニで店員におっぱいを触らせる。5ポイント。

触らせる？

いやいや、さすがに無理だろう。

コンビニの店員に、おっぱいを見せるだけではなく触らせる。防犯カメラに、ばつちり撮影されるはずだ。そうでなくとも、知らない男性に、女性になつた体を触らせるなんてできるはずがない。

「合計10ポイント。十万円か——」

一時の金のために闇バイトを選ぶ人がいるのも理解できる。今はお金がなく、収入の見



込みもない。体を見せて触らせるだけで十万円なら、割りに合うのではないか。

いや、こんな怪しさ満点のゲームに乗って、『人生』を棒に振るなんて気が触れている。

そこまで考えたところで疑問が湧いてきた。

「――『人生』って、いったいなんだ?」

僕は自らが変わることを望んでいた。そして『Eゲーム』のフレーズにひかれた。「自分自身を変えて、新しい環境で人生をやり直せます」という文章に。画面を見てじつと悩む。チャレンジをこなせば、新しい項目が追加される。それならば簡単なものをやって様子を見ればいい。

「まずは外出だ。あと、コンドームも買おう」

そこまでなら問題ない。そして、リストを一つこなせば、新しい項目も追加されるはずだ。全ては、そのあとに考えればいい。

本当にそうなのだろうか?

ここまで選択は、自分の意志でおこなっているのか。チャレンジリストによつて操られているのではないか。

疑念が頭をよぎつた。それ以上に、金の誘惑は魅力的だつた。



ジャージの袖と裾を折り曲げて長さを調整した。顔には白いマスクを着けた。

髪は腰ぐらいまで長くなっていた。男性だったときに手入れをしていなかつたせいか、ぼさぼさだった。

さすがにまとめた方がいいと思ったが髪ゴムは持っていない。「髪、ゴムなしで結ぶ」とネットで検索すると、髪の束を作り、まとめめる方法が出てきた。さっそく試してみたが失敗した。何度か繰り返して、うまく結ぶことができた。

ジャージのポケットにスマホを入れて玄関に行く。靴を履くとぶかぶかだった。まずいな、もらったお金は、服と靴で、だいぶ飛んで行くぞ。大盤振る舞いだと思っていたポイントが、実はそれほど余裕がない金額だと気づく。

とりあえず今日の外出はサンダルでいいか。我ながらゆるい格好だなと思いながら、アパートの部屋から外に出た。

二階から一階まで階段を下り、表道路に出た。もう夜になっている。街灯の明かりと車のライトが目にまぶしかった。

『ピロンッ！』

通知音が鳴った。

『コングラチュレーション！ チャレンジ『外出』を達成しました。加賀見亜紀は1ポイントを獲得しました！』

通知の声が、夜の道路に大きく響いた。急な声に驚いて「ひつ」と言ってしまった。



音は切つておいた方がよさそうだ。立ち止まってスマホをいじつて設定を変える。チャレンジリストを見た。リストの内容が更新されていた。

——コンビニでコンドームを買う。3ポイント。

——コンビニで店員におっぱいを見せる。5ポイント。

——コンビニで店員におっぱいを触らせる。5ポイント。

——外出中はマスクを外して素顔をさらす。1ポイント。

一瞬全身が凍りついた。このゲームの運営者に、自分は監視されている？

左右を見渡したが自分を見ている人はいない。スマホのカメラを使って見ているというわけでもないだろう。いったいどうして自分の姿が分かるのだ？

試しにマスクを外してみた。通知音とともに1ポイント入った。マスクを付け直そうかと思ったがやめた。何が起きるのか分からぬ。ポイント没収で済めばよいが、報復がつてもおかしくないと思つた。

警戒しながら歩いて、近所のコンビニの前まで来た。店舗の手前は駐車場になつていて、塾帰りの男子高校生たちがたむろしている。

少年たちが、じろじろとこちらを見てきた。胸のあたりに視線を向けている。なんだろうと思い、自分の姿を見る。暗がりにコンビの強い照明を浴び、トレーナーの胸のところに乳首の影が浮かび上がつていた。

歩いてくることで先端がこすれて乳首が勃起していた。慌てて両腕で胸元を隠して店内



に入る。

店の端の方に行つてドキドキを鎮める。このままコンドームを持つてレジに行つたら、完全に痴女じやないか。男物のジャージ、すっぴん、ノーブラ、乳首勃起、コンドーム。さすがに駄目だらうと思う。

顔が真っ赤になつているのが分かつた。ガラス窓に反射する自分の姿を見て、先ほど裸で自撮りしたこと思い出す。裸の自分はきれいだつた。顔も整つており美人と言える姿をしていた。あんな彼女が欲しかつた。首を横に振つて妄想を振り払う。

さつさとコンドームを買って帰ろう。人目を気にして棚からコンドームを取り、レジに移動した。

商品を出してバーコードの読み取りを待つ。おじさんの店員と目が合つた。おっぱいを見せれば五万円、触らせればさらに五万円。チャレンジリストを思い出して顔を真っ赤にした。

おじさんが恥ずかしそうに目をそらす。自分の乳首が限界まで張つているのが分かる。値段を言われてPayPayで支払う。どうするか。見せるか？ おじさんの表情を見て迷つた。

「おじさん」

「なんでしょうか？」

「おっぱい、見たい？」



目の前の中年男性が、首筋まで顔を真っ赤にする。

店員は冷静に、「そういうことをしては駄目です」と諭してきた。そうだよね、真面目に働いている人に悪いよね。少し頭が冷えた。見せて触らせて合計十万円。惜しいとは思つたがレジを離れた。

店を出る前にスマホを確認する。コンドーム購入で3ポイント増えていた。

チャレンジリストが更新されていた。レジから離れたせいか、店員関連のチャレンジが消えていた。

——コンビニ前にいる男子高校生たちにおっぱいを見せる。10ポイント。

——コンビニ前にいる男子高校生たちとセックスをする。20ポイント。

すぐに画面を消してスマホをポケットにしまった。おっぱいはともかく、セックスはまづい。人生破滅ではすまない。これはなし、ありえない。しかし、おっぱいを見せれば10ポイント。見せる時間は書いていない。一瞬見せればいいのだろうか。

下腹部がむずむずした。パンツの中が濡れていた。自分が女性として興奮しているのが分かる。

自動ドアを抜けて、たむろしている男子高校生たちの近くに来た。少年たちは、僕の姿を見てもじもじしている。僕が発情しているのが丸分かりなのだろう。

高校生たちは制服の股間のあたりがふくらんでいた。僕はジヤージで全身を隠している。それなのに裸で立っているように見えているのかもしれない。乳首のせいだろうか。ある





いは表情のせいか。なにか淫靡な香りがただよっているのかもしれなかつた。

「ねえ、きみたち。おっぱい見たい？」

懸命に笑みを浮かべて質問した。

男子高校生たちの数は四人。彼らは顔を真っ赤にしながらおろおろしている。一人、二

人と首を縦に振つた。店員のおじさんと違い、彼らには自制心がないようだつた。

「うん、じゃあ、建物の陰に行こう」

僕は、コンビニの建物の横にある暗がりを指差す。

男子高校生たちは僕よりも背が高かつた。女性化したことでの僕の体は小さくなっていた。男のときと違い、いつせいに襲われれば抗うことができない。股間からあふれた液が、ズボンの中で太ももを伝って流れてくる。脳内麻薬とともに愛液も多量に分泌されていた。

建物の陰に入った。表通りの車の音が遠くなる。時折ヘッドライトの明かりが裏路地に漏れこんでくる。その場所で、女になつた僕と、塾帰りの男子高校生四人が立つてゐる。

「おっぱいを見せるね」

ジャージのファスナーを下ろして肌着を持ち上げる。少し冷えた空気が皮膚の上を這つた。さらされた皮膚に鳥肌が立っているのが分かる。乳首ははち切れるほど勃起している。その周辺の乳輪もわずかにふくらんでいた。

高校生たちが腰を屈めて、食い入るようにおっぱいを凝視する。その姿を見て自分が優位に立っていると感じた。場を支配していることで精神が高揚している。今なら何でも命



令できそうな気がした。

「触つてもいいよ」

チャレンジリストにないことを口走る。命令されたわけではない自分の意志だ。

男子高校生たちは顔を見合させたあと、一人が手を伸ばしてきた。乳房に触れ、乳首をつまんできた。

「痛つ」

思つた以上の刺激に、思わず体をくの字にした。男子高校生は驚いて手を放し、一步下がる。

痛みで目が覚めた。自分が恐ろしいことをしていると自覚する。肌着を上げたまま、ジャージの前を両手で閉じて、路地裏から飛び出した。

夜の街を息を切らして走る。ジャージの下でおっぱいを出したままファスナーを上げて胸を隠した。

アパートにたどり着いた。階段を駆け上がり部屋に入る。鍵をかけて明かりを点けた。床に座り大きく息をする。頭の中が混乱していた。自分は何をやっているのだろうと疑問を持つた。

そうだ。報酬を獲得しているはずだ。急に気持ちが明るくなつた。

早く確かめなればと思い、スマホを出す。外出の1.0ポイント、素顔の1.0ポイント、コンドーム購入の3.0ポイント、おっぱいを見せた10.0ポイント。「換金」ボタンを押す。十



「五万円を獲得した。脳内麻薬が大量に出た。これで当面はしのげると思った。

「そういえば、音を切っていたんだ。新しいチャレンジが追加されているかもしねない」

鼻歌交じりでリストを表示する。

——自身の女性器に指を挿入してかき回す。1ポイント。

——自身のクリトリスを十分間愛撫する。1ポイント。

——自身の乳首を三十分間愛撫する。1ポイント。

全ておこなえば三万円。徐々に感覚が麻痺してきている。『Eゲーム』に命じられたまま自身を開発している。もう当座の生活費は稼いだ。ここで止めることもできる。

心臓が大きく鳴っていた。自分の顔がにやけているのが分かる。

これはアプリに命令されていることなんだ。自分の意志ではなく指示に従っているだけなんだ。

1ポイントしかもらえないことは、もうどうでもよかつた。背中を押してくれさえすればよかつた。一番簡単なのはどれだろう。短い時間でできるものから順番にやつていこう。座つたまま、ズボンとパンツを下げた。ローションを塗りつけたように、股間がびしょ濡れになつている。下半身だけ裸になつて割れ目に右手の指を這わせた。ぬるぬるしてて指先までは簡単に入れることができた。

指を入れてかき回すんだつたよな。奥まで入れるとわずかに痛みがあつた。そういえば処女膜があるんだつた。思つたよりは痛くなかったが個人差があるのだろうか。まだ指が



触れているところがじんじんする。これをかき回さないといけないのか。どうするのか迷つた。

快感と相殺すればいい。そのことに気づいて明るい気持ちになる。

左手を股間に触れさせ、クリトリスを探した。どれがその場所なのか分からない。わざかに硬い場所を見つけた。愛液をなすり付けていると、だんだん気持ちよくなってきた。

スマホを見て開始時間を確かめる。十分間愛撫すればいい。右手の指を入れたまま、左手の指でクリトリスを軽くつまみ続ける。息が荒くなつていく。自然に声が漏れ始める。「ふううつ、ふううつ」

呼吸に合わせてクリトリスをつまみ、膣の中をかき回す。だんだんコツがつかめてきた。痛みと快感は同時に与えるのではなく交互にした方がいい。感覚の落差が脳をかき回す。

徐々に痛みが引いてきた。こんなに早く消えるものなのかと疑問を持つ。作り替えられた体は、本物の女性の体なのか。姿形だけ似せたアバターなのではないのか。

「ううううううううんっ！」

快感の波が意識の防波堤を超えた。男性だつたらこれで終わりだ。しかし女性ならまだ続けることができる。指での愛撫をしばらくおこなつた。

体を傾けてスマホを見た。いつの間にか十分が経つていた。次は乳首を愛撫しないといけない。

手が二本ないことがもどかしかつた。クリトリスと膣、どちらかをやめないといけない。



考えたあと膣から指を抜いた。

肉壺をかき回し続けた指をながめる。愛液と血が混じってべとべとになっている。どんな味がするんだろう。指を口で含んで、処女の血と愛液の味を確かめる。美味しいものではなかつた。しかし、その行為を思いつき、実行したことが自身を興奮させた。

次は乳首だ。ジャージのファスナーを下ろして肌を露出させる。高校生たちに胸を見せたことを思い出す。あのとき肌着を上げたまま駆け出した。おっぱいの上に肌着がまくり上げられたままになつていて。

右手の指で右の乳首をつまむ。こりこりとつぶしながら愛撫し始める。目をつむり、自分がいる場所をコンビニ横の路地裏だと想像する。男子高校生たちに乳首を触らせる妄想をする。

男子高校生たちが自分の胸をガン見している。その少年たちにささやくように言う。乳首をつまんでみたい？ コクコクと首を縦に振る男子たち。彼らに向かって艶めいた笑みを向ける。一人ずつ順番だよ。男の子たちはジャンケンをして列を作る。そして順番に乳首を丹念に愛撫する。

指先だけでは飽き足らず口をつけて吸う者も出る。僕の股間はびっしょりと濡れる。男の子の一人が、僕のズボンの色が変わつていることに気づく。そしてしゃがんで顔を近づけてにおいを嗅ぎ始める。

——どうしたの、セックスがしたいの？ 優しくできるならいいよ。壁に手を添えるか



ら、ズボンをゆっくり脱がして、クリトリスを口で吸つてちょうどいい。

股間にかかる吐息。自然と開く大陰唇。硬く勃起したクリトリス。唇が触れ、軽く歯で噛まる。ひやっと声を上げる僕。そのまま口に含まれ、舌で執拗に転がされる。男性のときに亀頭だったものをなめ回される。

「あっ！」

妄想の外で体が絶頂を迎えた。足がピンと張り、頭とかかとでブリッジしたみたいになる。

乳首とクリトリスを愛撫する手は止まらない。目をつむり、妄想の中の男子高校生たちに犯し続けられる。まだ経験したことのないセックスを想像して、淫乱な顔を背後の男の子たちに向ける。

何度か絶頂を経験して、腕と指が疲れてきた。もう三十分経つただろうかと思い、スマホの時計に顔を向けた。

一時間も乳首とクリトリスをいじり続けていた。何度も強くつまんだせいで、どちらもじんじんと痛かった。やり遂げた充実感が心の中に広がる。びちょびちょになつた手を、肌着でぬぐつて『Eゲーム』を確認した。

タイトル画面の『E』の文字にルビが追加されていた。Estrus。どういう意味なのかと思いネットで検索した。

——発情期、繁殖期、性欲と性行動が高まる状態。



血流が速くなり、驚きとともに恐ろしさも感じた。まさに自分の肉体に起きている状態だ。

おそるおそる『Eゲーム』の画面に戻り、獲得したポイントを確かめる。3.ポイント増えていた。不安は吹き飛び、喜びが心を支配した。

心身ともに解放された気持ちを味わった。ここ数日の抑圧した気分が嘘のように消えた。「チャレンジ」のボタンを押して、リストがどうなっているのか確かめる。

——男性とセックスをする。100ポイント。

下半身の穴から、とろとろとした液が流れてきたのが分かった。

誰とセックスをするのか？

やることを前提に思考していることに、しばらく自分でも気づかなかつた。



第3章

マンガ喫茶での出会い

